

スクエアダンスのちょっといい話し

相談役 辻田 満

アメリカンスクエアという雑誌に掲載されたスクエアダンスの小話をS協機関紙が20年ほど前にご紹介した記事があります。その中から幾つかピックアップして3回の連載で「スクエアダンスのちょっといい話し」として紹介します。



1. 「分からないときは堂々と間違えよう」

スクエアダンスは人生と同じです。人は皆、経験を積み重ねて成長しているのです。ビギナークラスは完成されたダンサーを送り出す場ではありません。完成されたダンサーは、十分な時間と経験によって造られるのです。「私には自信がない」と思い込んでいる人はいませんか。それは誤りです。自信がないのではなく、経験が不足しているだけなのです。

「分からないときは堂々と間違えよう!」。前向きに経験を積むことこそが、スクエアダンス上達の秘訣なのです。

2. 「間違えるからスクエアダンスは楽しい」

スクエアセットを壊さずに踊り続けるための条件は、ダンサー1人1人が練習を積んで100%の正確さで踊ることだと思われるでしょう。その通りなのですが、実はこれだけではまだダメなのです。

それにはもう一つの条件が必要なのです。それは、8人が同じスピードで動き、ラインやウェイブを同じタイミングでつくることなのです。この二つの条件がそろったスクエアセットは絶対に壊れません。

そういうセットに入って踊りたいなあと思っているダンサーに次の名言を捧げましょう。「全員が機械のような正確さで動くならば、彼らはもはやダンサーではない。そこにいるのはロボットです。」「間違えるからスクエアダンスは楽しい。」のです。

3. 「コール+音楽+友情=スクエアダンス」

ダンスとは動くこと。ダンスとは音楽に合わせて動くこと。ダンスとは音楽があるから動いてしまうこと。スクエアダンス上達の最大の秘訣を教えましょう。それは聞く練習をすることです。コールは……どう動けばよいかというサインです。音楽は……いつ動けばよいかというサインです。良いコーラーは音楽に合わせて動くことをダンサーに教えてくれます。

良いコーラーは音楽があるから動いてしまうというダンサーを育ててくれます。しかし、スクエアダンスはコールと音楽だけでは完全ではありません。スクエアダンスは音楽に乗って踊る友情の踊りと言われています。

私たちはスクエアダンスを通じて友との楽しい時間を求めて踊りに来ているのです。

(第2話に続く)

スクエアダンスのちょっといい話

相談役 辻田 満



アメリカンスクエアという雑誌に掲載されたスクエアダンスの小話をS協機関紙が20年ほど前にご紹介した記事があります。その中から幾つかピックアップして3回の連載で「スクエアダンスのちょっといい話」として紹介します。

4. 「100%スクエアダンサーとは？」

あるコーラーが次のような定義を発表しました。100%ダンサー：自分は絶対に間違えず、常に正しい位置に動けるダンサー。

80%ダンサー：正しく動けるのに相手が間違えるといっしょに間違えるダンサー。

120%ダンサー：自分は絶対に間違えず、常に正しい位置に動き、さらに間違ったダンサーを正しい位置に優しく導けるダンサー。

5. 「スクエアダンスはスムーズに踊ると疲れない」

ダンスが終って家へ帰って「今日はそんなに踊らなかったのに疲れた」と感じる時と、「今日は随分と踊った割には全然つかれなかった」と感じる時がありませんか。この違いは何によって決まるのでしょうか。

もちろん、その日の体調にもよりますが、実はこの違いは、その日のダンスのスムーズさが大いに影響しているのです。リズムに乗らないダンスは疲れます。コールに追いつくために急がされたり、逆に間が空いて一時停止の繰り返しばかりが、一番の疲れの原因なのです。これにはコーラーの責任が大ですが、とにかくリズムに乗ってスムーズに踊る。これが疲れないという理想的な踊りなのです。

6. 「あの人の踊り方は何故きれいなのか？」

ダンサーの中には、とてもきれいな踊り方をする人がいますね。その秘訣は何でしょうか。それは「頭の高さ」なのです。前かがみになったりせずに、最も背が高くなるような良い姿勢で踊ることなのです。きれいに踊るためにいろいろ努力しているダンサーの皆さんにとって、やはりこれが最後の決め手のようです。俳優やモデルが頭の上に本をのせて歩く練習をするのは、まさに良い姿勢を身に付けるためなのです。この練習をしながら自分の踊っている姿勢と比べてごらんください。大きな違いに気付くことでしょう。頭の高さに関連するのは、目の位置です。自分の足元を見ながら踊ってはいけません。足元を見ると、頭が前に下がり、腰も曲がります。そうすると重心が前に移動し、これを調整するために一番みっともない踊り方、すなわちつまり膝を曲げて突き出しながら踊ることになってしまうのです。目は、見たものを脳に伝えるための器官です。自分の足元よりも自分の前方や周りを見たほうがはるかに役立ちます。相手に笑顔でコンタクトが出来ます。良い姿勢で、かつ身体がタイミングよくスムーズに動くこと。これが目標です。意識しなくても良い姿勢が保てるようになった時、ダンサーはあなたを見て「あの人の踊り方はなぜきれいなのか」と考えるでしょう。

(第3話)に続く

スクエアダンスのちょっといい話し

相談役 辻田 満



アメリカンスクエアという雑誌に掲載されたスクエアダンスの小話をS協機関紙が20年ほど前に紹介した記事があります。その中から幾つかピックアップして3回の連載で「スクエアダンスのちょっといい話し」として紹介します。

7. 「日本でNO. 1コーラーは誰か？」

皆さん、日本でNO. 1のコーラーは何方か知っていますか。そんな質問をされるとおそらく全国的にゲストコーラーとして活躍している著名なコーラーを思い浮かべることでしょう。しかし、そうではありません。NO. 1コーラーは皆さんの身近にいるのです。毎週、毎週たくさんのビギナーさん達に楽しいダンスを提供出来るように、心と魂を捧げているクラブコーラーさんこそが皆さんにとってのNO. 1コーラーなのです。実はこの名言は今から40年も前のものなのです。素晴らしい名言ですね。

8. 「自分のクラブはダンスのふるさと」

自分のクラブはダンスのふるさとです。スクエアダンスクラブはスクエアダンスの活動の中心となる場です。大きなクラブ、小さなクラブ、誰でも踊りに行けるクラブ、会場の大きさに見合った会員制のクラブ。スクエアダンスクラブとは、友情という精神と、快適なダンスという理想が具体的な形となって現れる場所なのです。ビギナークラスのメンバーが、やがてはクラブのメンバーになります。そこには単にダンスを楽しむだけではなく、一緒にいるのが楽しい仲間も見つかります。

ところでダンサーは、別の観点でクラブから役割を与えられます。ほとんどのメンバーが何かしらの簡単な責任を受け持っています。そういうグループが一番うまくクラブ運営ができるのです。入り口で出迎える係や、スナックを考えて準備する係などがそうです。

9. 「一遍の詩を朗読します」

とてもつつましい質素な男がいました。彼は、ふざけ回ることもなく、遊び歩くこともしませんでした。彼は、スクエアダンスもラウンドダンスも踊りませんでした。彼は、女性にキッスをしたことすらありませんでした。やがてある日、彼は死にました。彼は、自分に保険をかけていました。しかし、保険は支払われませんでした。保険会社は言いました。「恋をして、スクエアダンスを踊ってこそ人は生きてと言える。保険は、人生が終わった時に支払われるのです。」

（連載最終回）